



「伏した都市」ガッシャ

蛮族キャンペーンにおいて、「翠将の妹君」チツヒが拠点としているのが、「伏した都市」ガッシャと呼ばれる地底都市です。蛮族の叛逆の拠点として地下洞窟を改装して築かれた都市であり、かつての霧の街などと比べると必要最低限の設備しかない、申し訳程度の都市と言えます。

特筆すべき点といえば、都市レベルは低いにも関わらず、その主であるチツヒの影響から、ガメル貨幣を用いた通貨制度が徹底されている点です。ガッシャには主に人族から強奪してきた武具や消耗品を取り扱う商店がありますが、その取引には物々交換ではなく、ガメルによるやり取りが行われます。

ガッシャは清き水を湛えた広大な面積を持つ、エナ湖という名の地底湖の湖畔に築かれています。湖畔の山の手に、チツヒは住民からは「ハイカキン城」とも呼ばれる大きな館を構えています。チツヒはこの館の中で、霧の街を奪還しようと計画しているにはいささか熱意の感じられない、享樂的な生活を送っています。目に掛けている蛮族には、時折自らが足を運び任務を与えることもあります。

下町には前述したささやかな商店と、コボルドの料理人による食事処、ダルクレムなど第二の剣の陣営の神殿が無秩序に立ち並び、街路には都市の住人でありチツヒの軍勢に下った蛮族たちがうろついています。

蛮族の都市の割に、人族の奴隷がほとんど存在していない点が珍しいと言えます。

ハイカキン城（黄金宮）

エナ湖畔に築かれたガッシャの、山の手と呼ばれる環境が整備された土地の最も一等地に建てられたチツヒの邸宅です。その外観は白亜の大理石と黄金で作られたなんとも趣味の悪い金ピカな豪邸であり、住人たちはチツヒに畏怖と敬意を込めてハイカキン城、またはその見た目から黄金宮と呼んでいます。実際には大豪邸ではありますが、城と呼べるほどの設備が揃っているというわけではありません。

チツヒはこの邸宅の中で、日々霧の街奪還の計画を練っていると思いきや、実にバジリスクらしい享樂的な生活を送っています。一応、体裁を保てる程度の信頼のおける護衛役が邸宅内に配備されているようですが、よほど自身の実力に自信があるのか、とても一国一城の主を守るための兵隊とは言い難い人数のようです。

チツヒ自らが手駒に依頼を与える時などには、邸宅に招待して食事を振るまつたりすることもあるらしく、さほど閉鎖的でもないようです。

しかし街ではこの邸宅についてはいろいろな噂があり、地下に秘密の施設が隠されており、チツヒに反旗を翻した裏切者が囚われ、強制的に怪しげな労働に従事させられているとか、邪眼の力で宝石に変えられ地下に貯蔵されているとか、その噂のバリエーションには枚挙にいとまがありません。

「翠将の妹君」ハイカキンチツヒ

「気軽にチツヒと呼んでくれていいですよ♪」

・ジェイドバジリスク(?) / 女 / ? 歳

「伏した都市」ガッシャの支配者にして、霧の街の王者ヤーハッカゼツシュの妹を名乗るバジリスクの女です。最も、その関係性が事実であるかは定かではありません。

髪は栗色に近い茶色ですが、光の加減によっては深い緑に見える独自

の特徴を持ちます。左目のみを金貨を加工した眼帯で隠しており、露わになっている右目の瞳は翡翠色をしています。常に人のよさそうな微笑みを浮かべていますが、怒るときも笑顔で怒るため、底知れぬ恐怖を感じさせます。

人族社会の貨幣制度に非常に高い関心を抱いています。蜜族社会の非効率な物々交換よりも洗練され、スムーズに取引を進めることが出来る合理的な部分に強く感銘し、ガッシャでは人族から奪ったガメル銀貨や金貨を流通させた貨幣制度を徹底しています。そのことからか、特定の神を信仰しているわけではありませんが、第一の剣の神である貨幣神ガメルに多少興味を惹かれています。

性格は至ってバジリスクらしく享樂的であり、日々を気楽に過ごしています。自分が動くことより部下に働かせることを良しとしており、霧の街奪還の野望を持っている割には自分自身は積極的に活動していません。ただし、部下を働かせるためなら、自らが部下のもとへ出向き、直接任務を与えることも、優秀な蜜族を自らスカウトすることも厭いません。

お金の他にも人族の服装にも興味があるらしく、いろいろな衣服を揃えては自分の館の中で一人ファッションショーを楽しむという趣味を持っています。

その実力もまた未知数ですが、翡翠化の邪眼は間違いなく使用できるという情報があり、ジェイドバジリスクであると推測されています。



エナ湖にはいくつかの小島が浮かんでいますが、その中で最も大きな島が墓地島です。島全体が死んだ蛮族を埋葬する集団墓地として機能しています。

ガッシャでは、チツヒの施策により街中に死体を放置してアンデッドを無秩序に発生させることはご法度とされています。墓地島内でのみ、この法令は適用されないため、街で死んだ蛮族や、戦で死んだ蛮族の亡骸の大半がこの島に持ち込まれます。

島にしか所だけある船着き場のすぐそばに墓守小屋が置かれ、唯一の墓守を務めるアヌビスの少女が常駐しています。このアヌビスの少女ルンは、チツヒから特別な待遇を受けている有力蛮族の一人で、高レベルの神聖魔法と操霊魔法を操ります。

基本的に埋葬方法はルンに一任されているため、ルンは貯蓄を増やすために、利用者に複数の埋葬法を提示し、それに見合った料金を徴収しています。

無料で受けることが出来る「墓守のおまかせコース」は、ただ穴を掘って死体を埋め、墓石も何もなく土を盛るだけという簡単なものです。妖魔などの下級蛮族が、仲間や身内などを埋葬しに来るときによく選ばれるコースですが、「おまかせ」の真意とは、埋めた後に墓守が掘り返し、死体をどうするかは墓守次第という意味になります。この埋葬法で埋められた死体は、ほぼ間違いなく、ルンの使役するアンデッドの材料として用いられることになるでしょう。このことは暗黙の了解となっており、埋葬にお金をかける余裕のない下層の蛮族たちは、それを承知で頻繁に利用しています。

有料のサービスであるならば、墓石が用意され、アンデッドの素材として使用しないという特典が付く形になります。死者に対してある程度以上の感情があるものは、有料のサービスを利用しています。しかし有料の中にも、土葬、鎮魂土葬、火葬と3段階のランクがあります。土葬の場合、自然にアンデッドとして復活してしまうことがたびたび発生します。それを回避したければ、埋葬の際にレクイエムを捧げてくれる鎮魂土葬、さらに完全に灰まで焼き尽くすことでアンデッド化の可能性を限りなくゼロにした火葬と、死者と利用者の地位や財力により各種選択されます。

さらに一軍を任されている将や、街の重要なポストに就く蛮族が死んだ場合など、大きな地位にあるものは墓地島の地下に広がるカタコンベに納棺されることになります。こうした有力蛮族たちは、遺体にブリザーベーションを施され、豪華な棺に生前の愛用品などと共に収められます。カタコンベにはルンが特殊な呪法で作り出した永続化されたアンデッドたちが無数に配備され、厳重な警備となっています。

なお穢れが少なく、金銭的余裕がある蛮族の中には、高い操霊魔法の腕を頼って、リザレクションを請いにくるケースもあるようです。

「.....用入り？ 墓守のおまかせコース0ガメル、土葬100ガメル、鎮魂土葬500ガメル、火葬1000ガメル、死者蘇生10000ガメル」
・アヌビス/女/18歳

ガッシャの中で、チツヒから好待遇を受けている上位蛮族の一人です。浅黒い肌と対照的な病弱にも見える真っ白な髪を持ちます。まだ年若いアヌビスの少女ですが、高いレベルの操霊魔法と神聖魔法を操ります。

地底湖に浮かぶ墓地島でたった一人の墓守としての使命を任されています。穢れに満ちた蛮族の死体は、放っておけばアンデッド化の危険性が非常に高いため、蛮族社会では墓守の存在は欠かせないというチツヒの考えから、特別な待遇を受けているわけです。

利用者に複数の埋葬方法を提示し、それにより料金を徴収しますが、これもチツヒが許可を出しています。

性格は非常に根暗で、積極的に人と関わろうとしないダウナーなタイプです。反面、一度親しくなれば一応、できる限りの協力はしてくれるツンデレタイプという一面を持ちます。友人や仲間という存在がほとんどいないため、その真の性格を知るものはほとんどいないようです。

埋葬の料金一覧

コース	値段	詳細
おまかせ	0G	土葬＋盛り土。埋葬後、死体がどう使われようがそれは墓守の気分次第。
土葬	100G	土葬＋簡易墓石。アンデッド化する危険性はあるが、材料には使用されない。
鎮魂土葬	500G	土葬＋呪歌レクイエム＋墓石。アンデッド化の危険性を抑えているが、経年でアンデッド化する可能性はある.....らしい。
火葬	1000G	灰になるまで火葬＋墓石。ここまでやればまずアンデッド化はしない。
死者蘇生	10000G	操霊魔法【リザレクション】の行使。

大衆酒場「鏝銭亭」

ガッシャの中心部の、申し訳程度の商店が揃った地区に店舗を構える酒場です。昼夜を問わず、食事や酒を嗜みたい住民が集まり、それなりに繁盛しているようです。

店主を務めるのは、チェリーリアという名の年齢不詳のラミアの女性です。無類の酒好きであり、店で取り扱っているほとんどのアルコール類は彼女の独自のツテで入手しています。反面料理はほとんど出来ないため、複数人のコボルドをコックとして雇っています。

飲食店として経営していますが、同時に人族の社会でいうところの冒険者の店に相当する役割も同時に果たしています。店主のチェリーリアは人族の文化に興味を持っており、人が集まる場所を利用して、住民たちの困りごとと、それを解決できる人材を募集したのです。特に蛮族は人族よりもパーティを作って難事に立ち向かうという発想に行きつき辛く、一人で解決しようとしてドツボにはまるが多かったため、この事業は蛮族社会でも需要と供給がハマリ、軌道に乗つつあります。お困りごとと解決の報酬はツヒが持ってくる仕事に比べれば大したことはないため、店名の「鏝銭」の名がいい皮肉になっているという評価もあります。

また、この店では暇を持て余した腕に自信のある蛮族がたむろしており、金銭などのやり取りで協力を仰ぐこともできるでしょう。

「蟒蛇の」チェリーリア

「わあいお酒。わたし、お酒だあいすき〜♪」

・ラミア/女/?歳

ガッシャの中心部で、大衆酒場「鏝銭亭」を経営する年齢不詳のラミアの美女です。三度の飯より酒が好きと豪語する酒豪で、酒場の店主のくせに常に酒瓶かジョッキやグラスを手に、アルコールを楽しんでいます。

普段はほんのり酔った上気したにこやかな表情をしています。が、実は卓越した魔法の使い手であり、若い頃は人族の生き血を得るための手段は択ばず暴れまわっていたようです。

当時は人族の村を侵略し乗っ取り、自身が頂点となって蛮族の集団を率いて餌となる人族を困うという生活をしていたものの、すぐさま冒険者の手により阻止され支配者としての生活が長く続いた試しはありません。自身は運よくテレポートなどの魔法を駆使して窮地を脱していましたが、侵略しては奪還されるという生活を何度も繰り返すうちに、次第に人族は個々では弱くとも、危機に対して結託して立ち向かうと手に負えなくなるということを学んだ末、人族の文化や危機への対応力に興味を持つことになりました。

ガッシャの街に流れ着いたのは偶然ですが、人間の街のように金銭のやり取りが活発に行われているところを気に入り、人族の文化を学んだ末に辿り着いた、趣味と実益を兼ねた酒場の経営に乗り出します。また、難事には協力し、個々では弱い力を何倍にも高める人族のやり方を模倣し、住民の困りごとを集めて解決するという、冒険者の店のような事業も展開しています。

「(一応戦える)ウエイトレス」オフィーリア

「チェリーリアさん、お食事の時間ですよ」

・ナイトメア/女/16歳

鏝銭亭でウエイトレスとして働く、ガッシャの街唯一(推定)の人族です。長い銀髪を働きやすいように三つ編みにまとめた線の細い、外見年齢は年相応のミドルティーンの少女です。

かつてチェリーリアが人族に敗れた際、テレポートで逃げ帰

った留守にして久しいアジトに盗賊団が住み着いていたことがあり、そこに奴隷として捕らえられていたのがオフィーリアです。ナイトメアではありますが、生まれて以来、まともな教育も戦術も身に着けずに浮浪者然とした生活であったため、戦闘能力を持っていませんでした。チェリーリアは気晴らしのために盗賊団を壊滅させましたが、そのことから結果的に解放されたため、えらくチェリーリアに懐いています。チェリーリアもその頃にはすでに人族の文化に興味を持ち始めていたため、そのままオフィーリアを拾って一緒に暮らすようになりました。

現在でもその関係は良好であり、チェリーリアがガッシャで鏝銭亭を経営し始めると、給仕としてその手伝いをしています。またツヒからもダークナイトとして居住権を買っています。

以来、ダークナイトの名が廃らないようにと、チェリーリアからある程度の戦闘訓練を受けたため、ごろつき程度なら戦えるくらいの戦闘能力を身に付けています。

なお、チェリーリアの食事＝吸血の相手として、自ら進んで血を差し出しているため、チェリーリアにとっても欠かせない存在となっています。

「爆熱神掌」ルル・ル・ルル

「あなた、強そうですね！ バトリませんか！！」

・バステト/女/17歳

娼婦しの旅の途中にガッシャに立ち寄り、そのまま居着いているバステトの少女です。淡い褐色の肌に背中まで伸ばした癖のある黄金色の髪を持ち、バステトにありがちな猫口が特徴的です。見るからに元氣溢れる直情的な快活娘であり、性格もそのまま竹を割ったようなさっぱりとした人物です。

ガッシャに立ち寄ったのはたまたまですが、ツヒが強い、もしくは将来的に強くなりそうな蛮族をスカウトしているという話を耳にして、ここにいれば強い男と知り合えるかもしれないと意気込んでいます。

流派【リオリット臨死反骨掌】を使う格闘家であり、強いやつに会いに来たを公言しているだけあり、スリリングな戦いを好みます。相手の懐に飛び込み、その力を10引き出して、11の力で勝つというのがモットーです。

分かりやすい性格をしている方ではありますが、強ければ男でも女でも構わないといった節があります。ガッシャにやってきてから一方的に挑戦し、完膚なきまでに叩きのめされたアヌビスの墓守ルンに対して強い感情を抱いています。ルンに友達がいないことを知り、やはり一方的に親友だの心の友だのと言い張り、顔を合わせば「女の子でも構いませんので子作りしませんか！」と言い寄っている姿が見受けられます。

ガッシャの中心部の、申し訳程度の商店が揃った地区に店舗を構える雑貨屋です。店頭には翡翠の像が飾られていることが店名の由来です。現在のガッシャでは、消耗品・日用品・冒険道具・武具を問わず、ほぼすべてのアイテムと呼ぶべき品物はこの店で取引されています。

店主はアンデルセンという老人で、過去の戦で両目の邪眼を潰された盲目のバジリスクだと言われています。目は見えませんが、いわく手で触れるだけでそれがどうい品物であるかを見極めることが出来るらしく、実際、顧客たちがアンデルセンに売りたい物を手渡したところ、ぴたりとその品物を言い当て、適切な価格を提示したと言います。

取り扱う品物は、街の住民たちがいずこからか(意味深)調達してきたものを買い取ったものが大半で、需要と供給のバランスはお世辞にもよいとは言えず、品切れが頻発することもあります。そうした時には、買い取り価格増額キャンペーンを打つなどして、品物をかき集めています。

なお、アンデルセンは過去の実力を見込まれ、チツヒが街に招聘した上位蛮族の一人です。街に新しくやってきた蛮族の中には、そのことを知らず、店主が盲目であることをいいことに、強盗に入るものも稀に存在します。ですがそうした強盗が今まで生きて帰った事例は一度もなく、翡翠堂が騒がしかった翌日には、見覚えのない翡翠の像が店頭飾られているそうです。

また、ガッシャ都市内で流通しているガメル貨を調達する役割も担っています。たびたび鏹銭亭に翡翠堂から、翡翠を人族の街で売却し、ガメル貨を獲得してくるという依頼が出されることがありますが、その翡翠の出どころは公然の秘密といっても過言ではないでしょう。

「いらっしやい。覚えのない気配だね.....新しい住人かね？」

・バジリスク/男/推定450歳

ガッシャの街で雑貨屋「翡翠堂」の店主を務める老バジリスクです。過去は無類の強さと見識を誇ったとされていますが、壮絶な戦の中で両目の邪眼を潰され、隠居したとされています。チツヒがその栄光を讃え、何度も協力を請うた末にようやくガッシャに招聘した上位蛮族の一人です。

両目を失っていますが、手で触れただけでアイテムの種類や効果、価格などを瞬時に言い当てる特技を持っています。本人は形や重さや触感、また漂ってくる魔力を感知すれば大体知識の中にあるどれかに該当すると言っていますが、その真偽やからくりは定かではありません。

その性格は好々爺然としており、全盛期の力も失っているため蛮族らしさは感じさせません。しかし、その伝説やチツヒが直々に招聘したことを知る蛮族らは、ひとかどの経緯を払って接しています。

極まれにアンデルセンのことを何も知らない新参者が無礼を働くこともありますが、そうした場合、前述したように翌朝になるとアンデルセンはいつもと変わらぬ調子で店も何事もなく経営しており、その店先には見覚えのない翡翠の像が増えているようです。このことから、アンデルセンはチツヒと同じくジェイド・バジリスクであり、同族のよしみで招聘に応じたとか、両目を潰されているというのは嘘であり邪眼は健在であるとか、様々な憶測がされていますが、その真実に触れようとする住民は誰一人いないでしょう。

密偵集団「スパイスガールズ」

ガッシャにおいて、人族の街でいうところの盗賊ギルドの情報屋に相当する集団です。もともとはチッヒの子飼いの密偵が、円滑に情報を集めるために独自に組織したものが次第に規模が大きくなっていったものです。主に人族の街に潜入できる能力を持った蛮族で構成されており、人族社会の情報収集から噂の流布まで、幅広く実行します。

リーダーとなっているのは、組織の発端であるローリエ・ベリーフというラミアの女性です。彼女は現在でもチッヒ直属の密偵であり、主にチッヒの命令によって仕事をしています。ほとんど組織としての仕事をこなす暇はありませんが、そこは優秀な部下たちがカバーし、街で活動する蛮族たちに様々な情報を提供しています。

構成員は全員が女性であり、密偵力に長けたラミアやフォクシアを初め、戦場ではほとんど姿を見ない女性のオーガ種、数は少ないもののレイヴンやクレセントテールなどが挙げられます。

組織名はローリエの命名であり、戦いの技能よりも密偵力に特化したため味噌っかす扱いされていた者たちが、情報により戦況を左右させることから、「小粒でも一味違う＝スパイス」という意味合いと、「スパイ」を掛けたダブルミーニングとなっています。ローリエはたまたま本名でしたが、それに倣って構成員たちもコードネームとしてスパイスの名前を好んで使用しています。

「蛇の目の」ローリエ

「どんな情報でもお手の物よ……暇があれば、だけれどね」

・ラミア/女/年齢不詳

チッヒ直属の密偵であり、優秀な腕前を持つラミアの女性です。ラミアエージェントという特に密偵力と変身能力に長けた特種であり、いくつもの人間形態を持っているとされています。それどころかラミアとしての本当の姿すら謎に包まれており、スパイスガールズの構成員ですら、彼女の顔を見るたびに姿が違うため、新入りか何かと勘違いし、彼女から言い出すまでそれが組織のボスであることにすら気づかないこともままあるようです。ローリエ自身、そうしたリアクションを楽しんでいる様子があり、一応円滑かつ真面目に仕事を行うためのために、「今月のボスの素顔」を決め、事前に構成員に通達しています。

諜報活動を活発化させるためにスパイスガールズを構成した立役者ではありますが、現在でもチッヒの子飼いの密偵としての職務が主であるため、トップに座していますが組織としての仕事はほとんど行っていません。それでもなお、組織の構成員がどこでどういう活動をしているのだとか、どういった情報を仕入れているかなどをおおむね把握しているあたり、凄腕の密偵の名は伊達ではありません。

「事務室の密偵」ペッパー

「この程度の仕事でしたら……あのトリオでも大丈夫でしょう」

・ラミア/女/26歳

スパイスガールズ結成時からのメンバーの一人で、スクエア型のひらめき眼鏡をかけ、キッチリと手入れされハーフアップにまとめた髪に、ぴしっとしたスーツ姿の「デキる」女性の雰囲気存分に漂わせたラミアの女性です。

組織の構成員は、鏝銭亭や中央の商店地区などガッシャの街中の各地に好き勝手に散らばっていますが、一応、本拠地となる事務所なる建物を所有しています。ペッパーはその火元責任者であり金庫番であり事務員でもある存在です。

私の強い密偵の少女たちの事実上のまとめ役であり、彼女らのスペックのほとんどを把握し、密偵の管理を行っています。街中に散らばる特定の密偵が捕まらない、どの密偵に頼むが一番いいのかが分からない時などは、事務所に訪れペッパーに斡旋してもらおうと、最適解を提示してくれると評判です。

情報の整理を行う職務上、事務所にいながらにして様々な情報を知っているため、場合によってはペッパーに直接料金を支払い、その場で情報を手に入れることもできます。ただし彼女は構成員たちのスキルアップのために仕事を割り振ることも仕事の一環と考えているため、事務所での情報のやり取りを希望する場合、密偵の斡旋料や相場よりも高い値段を提示する場合があります。

なお、一日中机仕事をしているため、体重の増加とボリュームアップ気味な下半身、足ないし蛇の身体がむくんで仕方ないことを気にする非常に難しい年齢に差し掛かっています。

「花の密偵トリオ」カプ・サイ・シン

「諜報しちゃう？」「諜報するのー？」「やっちゃおっか！」

・フォクシア/女/14歳

スパイスガールズの中で一番の新入りの三人組のフォクシアの少女です。全員が同郷であり、幼い頃からの仲良し三人組で、最近の若いフォクシアによくある好奇心から里を飛び出したクチです。

三人とも同い年であり、赤髪ポニーテールにした標準体型のカプ、金髪ツインテールの豊かなお胸のサイ、青緑髪のボブカットのまな板体型がシンです。カプがリーダー格で常にグループを引っ張り、サイはおっとり屋ですが性格的に他の二人の舵を取ったりブレーキ役となっており、シンは何も考えていない暴走キャラのように見えて危機感知能力が一番高く、グループを危機から何度も回避させています。

種族がら密偵力の素質は高いはずなのですが、常に三人一緒に行動したがる傾向にあり、おまけに単独で何かをやらせようとするたびにボカをするという欠点を持っています。三人のいずれか一人に情報収集を依頼すると大体がロクな結果にならず、手付金の無駄だという評価ばかりです。ですが三人全員と一緒にして依頼をすると、新入り故の料金の安さに見合わず、なかなかどうして有益な情報を仕入れてくることも稀にあるようです。ただし、三人陽気なかしまし娘、非常にマイペースに仕事をするため、思った以上に時間がかかってしまうことも多々あるようですので、やはり時と場合でしょう。